

常に緊張感を持って挑んだ 3 週間の教育実習であった。授業見学・授業実践から授業・指導案について、また、文化祭準備を通して生徒との交流について多くのことを学ぶことができたと感じている。ほんの一部ではあるが、教育現場を見て、教師として働く大変さややりがいも知ることができた。

まず、授業について。多くの授業実践の機会と研究授業をする機会をいただいた。それらを通して、自分の不勉強さを思い知った。それは英文法の知識についてだけでなく、その学年の既習事項についてであったり、授業の目標に合った教授法などに関する知識も不十分であった。私が英語科を担当したクラスは、高校 3 年時に 2 週間の留学を控えており、基礎的な学力の定着もさることながら、英語を話す実践の場も必要としていた。しかし、今まで文法知識の定着を主とした英語教育を受けていた私にとって、コミュニケーションな授業を作ることは大変難しかった。準備を入念に重ねても、想定外な部分が発見されたり、同じ授業を他のクラスにするにしても全く違う流れになったりし、授業は生き物のようであると実感した。1 つの授業を共に作り上げる生徒個人の存在をしっかりと認識するというのも、私の課題となった。教育実習に行く前に持っていた「クラス」というまとまった概念がいかにも間違っただけのものを教壇に立って感じた。生徒 1 人 1 人のレベルや授業に求めていること、意欲の差があることを目の当たりにし、一斉授業において個人を意識して授業を進めることが難しく、戸惑った。生徒全員がそれぞれ授業に対して参加意識を持てるような展開や活動を意識したが、最後まで教師主体になってしまったように思う。それぞれ異なった生徒たちがいる中で、中間層を意識し、英語が得意な生徒も、そうでない生徒も積極的に取り組める授業を運営することの重要性を感じた。

次に、生徒とのコミュニケーションについて、HR 担当クラスと教科担当のクラスが別であったため、どのクラスにしても交流は不十分になってしまったと感じているが、教科担当のクラスでは、留学に関心のある生徒もおり、3 年時の留学に不安を抱いている生徒に私自身の留学経験を話し、相談に乗ることができた。HR クラスでも文化祭準備期間であったため、準備へのアドバイスや相談に乗ることが少しできた。どの生徒に接する際にも、生徒との距離感を意識した。教育実習生という立場であることを常に留意し、言葉遣い・発言・態度等の言動に十分注意した。生徒との距離感を離しすぎてしまい、うまくコミュニケーションが取れないことが多々あったが、自分自身を曝け出したり、生徒 1 人 1 人に誠実に向き合ったりすることが大切だと、生徒との交流を通じてわかった。

今教育実習では生徒の立場では見えなかったことが多く見え、沢山の学びがあった。3 週間という短い期間の中で今回発見した反省点をすべて改善することはできなかったが、それらに気付くことができたという面でも、今後、教員を目指すにおいて、本当に有意義な教育実習であったと思う。